

## はじめに

筆者がミシガン州立大学に在学中、ちょうど学位論文の構想を練り始めた頃、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ地域にある途上国への遺伝子組換え技術の技術移転プロジェクトを実施していた研究所の一室が爆破されるという事件に遭遇した。後に、急進的な環境保護グループの犯行であるとローカルニュースで報じられたが、総額にして\$400,000もの損害があったという。ミシガン州立大学は同州のランドグラント大学に指定されており、連邦政府から土地を寄託され、農学を教える高等教育機関という位置づけである。従って、遺伝子組換え技術でも農作物、食品へのアプリケーションに特化した研究に従事する研究者が多い。不運にもそうした事件に巻き込まれてしまった研究者のみならず、事件には巻き込まれなかったが、自分の研究室がそうしたアクティビズムのターゲットになるのではないかと戦々恐々としているという話を聞いたのを克明に覚えている。こうした筆者の体験が、先端科学技術を巡る社会的な論争という研究テーマへの興味につながった。その事件以来、自然科学系の学科のみならず社会科学系の学部においても遺伝子組換え技術を題材にさまざまな研究が行われ、多くのセミナー、ワークショップが開催された。ナノテクノロジーが今まさにその当時の状況を想起されるような状態であると感じる。当時は、途上国地域において遺伝子組換え作物の商業栽培がされていないという事情もあり、遺伝子組換え作物の社会的な影響について述べる多くの先行研究はその他の技術を事例とし、遺伝子組換え作物の社会的な影響を推測するという手法を使っていた。商業化されていない技術また安全性、リスクなどに関し科学的な知見が集積過程にある技術の場合、どのように研究すべきかは多くの研究者が悩む点であろう。

そうした試行錯誤の過程で、出会ったのが言説論である。筆者は、特定の社会集団がある先端科学技術に対して付与する意味を探り、また社会集団間の相互作用の中で生まれてくる主観的現実を理解を深めるという象徴的相互作用論の考え方を取り入れることにより、研究開発途上である先端科学技術の分析法を組み立てていった。もちろんのこと現在もお、試行錯誤の過程にあるため、こうした分析手法は構築途上にあるアプローチである。

本稿の資料編で紹介するボルタンスキ、シャトーレイノのこのような研究が日本で紹介されるのは始めてであるが、フランスにおいても言説論を使い先端科学技術の分析を試みる研究が登場しているというのは、アメリカ社会学のみならず欧州の研究者が、こうした言説論アプローチの有効性を認めているということを示している。

最後に、こうした新しい議論を紹介する機会を与えていただいた国際基督教大学社会科学研究所関係者の皆様に感謝を申し上げたい。

2007年2月

山 口 富 子